

会 議 議 事 録 (抄)

会 議 名	2025 年度専門学校東京テクニカルカレッジ 第 2 回情報処理科教育課程編成委員会
開 催 日 時	2025 年 12 月 4 日 (木) 15 時 40 分～17 時 00 分
会 場	専門学校東京テクニカルカレッジ 地下 1 階 テラホール
参 加 者	<外部委員> 後藤 英明 (株式会社ネクストワン) 開原 裕一 (株式会社ネクストワン) 橋詰 篤志 (ソフトビューベリオン株式会社) 片山 善久 (株式会社エフ・エム) <内部委員> 井坂 昭司 (専門学校東京テクニカルカレッジ 情報処理科科长) 呉石 義明 (専門学校東京テクニカルカレッジ 情報処理科主任)
	<系別分科会> (第二部) 1. 議長挨拶 井坂より挨拶 2. 前回 (系別分科会) 議事録の確認 3. 意見交換 IT 業界の変化、生成 AI の活用状況、 最近の学生・新入社員の特性・セキュリティについて、その他
討 議 内 容	1. 学事体制とカリキュラムの変更 (井坂) ・期制度の変更：文部科学省 (文科省) の専門学科の単位に関する指導を受け、従来の 5 期制から 4 期制へ変更する。 ・授業時間の定義：大学の指針では 1 科目を 45 時間 (予習・復習を含む) で考えるよう求められている。 正式には、大学に沿った単位制では 15 回の授業プラス 1 回の試験という形となる。 ・新授業スケジュール：授業を 15 回実施し、16 回目を試験とする形になる。 4 期制への変更に伴い、1 週間あたりの授業数を 8 週で 16 コマ (週 2 コマ) とする計画である。 ・年間スケジュール：7 月いっぱいまでで 1 期と 2 期を終了させ、8 月の頭から夏休みに入る。9 月の 2 週目過ぎから 3 期が始まり、3 期の終わりが 11 月の半ばとなる。 ・学園祭と冬休み：3 期と 4 期の間に学園祭習週間を挟む (11 月終わり頃)。 4 期は 12 月までに 4 週分行い、冬休みを挟んで年明けに 4 週分を行い、大体 2 月中には 4 期全てが終了するスケジュールとなる。この年間計画の変更は、これまでの 7 月上旬に 2 期が終わり 8 月終わりから 3 期が始まるという形から大きく変わった点である。 2. 学園祭と成果発表会 (井坂) ・学園祭の再開と目的：コロナ禍を経て初めて学園祭を 1 日実施した。かつては先生の労力ばかりかかり、開催する目的が不明瞭な状態だったという背景がある。 ・現行の取り組み：成果発表を行いつつ、来場客に楽しんでもらうことを目的とする。 ・模擬店の導入：模擬店 (10 店舗程度) を再導入し、大変ではあるが呉石が中心となって仕切ることになった。 ・今後の展望：来年度は学園祭を 2 日間に延長することも検討している。

・成果発表会：来年、3月7日の成果発表会は学園祭とは別で、午前中に1年生、午後に2年生の発表を行う予定である。建築系は学生の作品を展示する。

3. 学生・採用に関する課題

(井坂)

- ・健康状態の理由による退学がある。
- ・留学生の課題：留学生は日本語能力と経済的な問題が主である。特にミャンマーの学生は、本国の情勢変化で、資金源を失い退学になるケースもある。
- ・学力と定着率：留学生は真面目で欠席はほぼないが、授業についていけない層（できない層）が存在する。彼らは学校での勉強、予習復習、アルバイトの3つをこなすのが大変である。
- ・基礎学力と論理的思考：日本や中国、韓国の学生と比べ、留学生は基礎学力が低く、理解力や論理的思考が鈍い傾向がある。文章を読んで、どの式を使って答えを出すかといった思考の流れを構築できない学生が多い。

4. IT 業界の動向と AI の活用

(井坂)

- ・日本人の学生減：IT系を選ばない日本人の学生が増加している理由として、大学全入の時代であることや、「IT開発の業務もAIに変わってしまう」という危機感が挙げられる。

(片山)

- ・企業の効率化志向：各企業は効率化を非常に重視しており、利益追求のため「AIの活用によって効率を2倍に上げて利益を1.5倍に上げる」といった具体的な目標を設定している。
- ・AIによる開発と分析：大手企業ではAIによるアプリケーション開発を推進する動きがある。また、旅行会社などでは、従来Tableauなどで行っていた巨大データベースの分析をAIに任せる方向でトライアルが始まっている。

(橋詰)

- ・AIエージェントの利用：ソフトバンクの孫会長はAIエージェントを年間10億個作るという話も出ている。これは、特定のことにだけ回答できるAIエージェントを細分化して作り、それらを連携させて処理するシステムがトレンドになっていることを示唆している。
- ・AI活用の形態：大企業ではセキュリティ懸念から、外部に情報が出ない内部環境でのAI利用が進んでいる。一般の開発者レベルでは、検索の延長として業務効率化に使われるパターンが多い。
- ・高度な現場のAI利用：一部の先進的なプロジェクトでは、AIが処理しきれない業務のみを人間にパスする仕組みが導入され始めている。

(開原)

- ・重要な能力：AIエージェントを活用する部門では、エンジニアの要件として、論理的思考力と、お客さんから業務のシナリオを引き出し、AIが解釈できる形にまでかみ砕く能力が求められている。

5. AI に対する教育・運用ポリシー

(井坂)

- ・学校のAI教育準備：学校全体として、情報リテラシーを減らし、AIリテラシーを取り入れる計画である。導入に先立ち、AI活用に関するポリシーを策定中であり、作成にはAI自身も活用している。

(片山)

・企業ポリシーの策定：企業は国から出されている「生成 AI ガイドライン」などの指針をベースに、自社に合うようにカスタマイズしてポリシーを作成している。

(橋詰)

・顧客先ガイドラインの遵守：顧客先に常駐する企業は、顧客先が定める AI 使用に関する研修プログラムやガイドラインに従う必要がある。

(開原)

・AI 利用の制限：ある企業では現在、生成 AI の使用を禁止している。別の企業では、誰が AI に何を質問したかという利用履歴を残している。

(片山)

・ポリシーの重要性：AI 教育を始める段階で、社員から「これは使っているのか」といった質問が必ず出るため、ガイドラインを先に作成する必要がある。

(呉石)

・情報漏洩の事例：大学のインターン生が、クライアントのデータを意識せずに生成 AI に食わせた結果、守秘義務違反となり、会社が巨額の賠償金を請求され、事実上解散に追い込まれた事例がある。この事例は、学校や企業が AI 使用の線引きを教えないことの危険性を示している。

(全員)

・教育の必要性：学生に対しては、卒業後、会社ごとのポリシーに乗っ取って AI を活用できるよう、生成 AI の怖さや正しい使い方を理解させる教育が必須である。

(井坂)

・生成 AI の悪影響：生成 AI の使用により、学生の提出課題の品質が上がったように見えても、実際には学生自身が内容を理解できておらず、開発現場では品質が下がっているという問題が発生している。

(開原)

・品質低下とセキュリティの増加：AI に頼って基礎を理解せずにコードを書いた結果、世の中に出回るものの品質が下がり、脆弱性診断などセキュリティの仕事が爆発的に増えている。

6. その他 IT 業界の変革とセキュリティ

(片山)

・クラウドシフト：AWS や Azure などのクラウド活用企業が増加しており、クラウドでの業務が増えている。

(橋詰)

・セキュリティ意識：大手企業でのランサムウェア被害や情報漏洩事件（アサヒビール、アスクルなど）を受けて、社員のセキュリティに関する認識を高める必要性が高まっている。多くの侵入は、従業員が送られてきた悪意のあるメールを開いてしまうことから始まる。

(開原)

・セキュリティ対策：企業はわざと偽のメールを送って社員の開封率をテストし、引っかかった者に研修を受けさせるなどの対策を行っている。

(井坂)

・メールリテラシの欠如：今の学生は LINE 世代であり、メールを日常的に使わないため、件名や氏名のないメールを送るなど、ビジネスマナーに欠ける傾向がある。学校では、遅刻連絡などでメールの使用を義務付け、社会人としての基礎を教えている。

(開原)

・誤送信の危険性：メールアドレスの自動サジェスト機能（履歴）は誤送信の大きな原因となるため、これを停止している企業がある。

(片山)

・パスワード付きファイルの問題：パスワード付きの Excel ファイルなどを送る慣習があるが、多くの場合、自動送信システムによりパスワードとファイルが同時に誤送信先に送られてしまうため、セキュリティ上の意味をなさないことが多い。代わりに、PDF を送り、別途認証コードを入力させる方式が増えている。

会議の総括：当学園では、は文科省の指導や私学法の改正に基づき 4 期制への移行や、カリキュラムの調整を進めており、特に AI 時代に求められる人材育成のため、セキュリティ教育の強化や AI リテラシの導入を急いでいる。IT 業界では AI の活用が進む一方で、セキュリティ意識の低さや、AI に頼りすぎることで生じる品質低下が大きな課題となっている。